

TRIAL &

JVC 日本国際ボランティアセンター会報誌 トライアル・アンド・エラー (試行錯誤)

ERROR



【特集】震災から4年経って

「住民によるまちづくり」に
JVCは何ができるのか

【特集】イラク医療支援共同事業報告

困難でもイラクの
医療支援は終わらない

JVCの支援する福島県南相馬市の仮設住宅サロン。コミュニケーションをとる場所の少ない仮設住宅で貴重な憩いの場となっている。放射能を気にせず遊べるため、子どもたちにとっても大事な遊びの場となっている。

気仙沼市の鶴ヶ浦(つるがうら)の「まち歩き」で作成した絵地図を前に、住民から話を伺うJVC岩田(前列左端)。「まち歩き」は、地域外の参加者が集落を歩いて案内役の住民にインタビューを重ね、「地域にあるものを探す」活動を指す。住民が普段目にするものを地域の魅力として再認識し、将来の地域づくりに活かすヒントの収集が目的だ。住民からは「震災前の活気を取り戻したようだ」といった声が寄せられた

福島県南相馬市



宮城県気仙沼市



しかし、それはまだまだ「そう見える」だけだ、と思う。

黒子に徹した 災害FMの運営

11年4月。南相馬市役所は残っ

た住民への支援物資の配布や病院の情報提供を必死に行おうとしていた。しかし、防災無線や紙媒体での広報は機能せず、市は臨時災害放送局(災害FM)を立ち上げることになった。JVCが市役所の依頼をうけスタッフを派遣して1年、地元のラジオとして根づくことを期待しながら、黒子に徹して復興を支えた。

JVCが願っていたのは、災害放送局としての役目を果たすだけでなく、南相馬で起きつつあった「分断」を緩和するツールとしてラジオが役立つことだった。

当時JVCから派遣されたスタッフは「南相馬には住民間で3つの分断がある」と話していた。放射能の人体の影響に対する考え

方の違いによる分断。賠償金の違いによる分断。世代による分断。様々な意見があるなか、ラジオは様々な市民の声を放送した。互いの意見を聴き合うことから、分断を乗り越えようとした。

FM局の運営にあたって、JVCは裏方にまわった。初期はボランティアを地元から集め、後に県の助成金で市にスタッフを雇用させた。集まったのは全員が放送の素人。放送が形になるには長い時間がかかった。放送のレベルだけ考えれば、東京からのプロ招へが一番簡単だ。だが、最終的にその地域に残り生活するのは地元の人間だ。地元スタッフだけで運営できるまでの歩行器としての役割をJVCは担ってきた。今では、FM局は立派に自分たちの足で立ち、放送を続けている。

市役所が実施した「平成26年度広報・広聴に関するアンケート調査」では、南相馬のラジオを「よく聴く」人が5・5%、「時々聴く」



サロンでの3ヵ月ごとの自治会主催の輪投げ大会



2014年初めまで放送されたひばりFM英語放送。JVCが運営支援

「何度か」を入れると38・2%が聴いていることがわかった。ラジオの聴取率としては良い結果といえるとのこと。困難ななか、放送を続けてきた成果だ。

仮設住宅の 礎となるサロン活動

JVCは12年1月より、南相馬市鹿島区の仮設住宅で、住民のコミュニケーション不足解消のため、集会場を利用したサロン活動を開始した。阪神・淡路大震災では、仮設での孤独死が相次いだ。そんな事態を防ぐ対策が求められていたのだ。

仮設の住民の出身はばらばらだ。JVCの11年8月の調査では、数ヵ月暮らしても隣人が分からない状況だった。また、息子夫婦など若い世代が放射能を避けるため市外に避難し、老夫婦だけが仮設で暮らすケースが極めて多かった。

開始に際しては、FM局支援の活動で出会った、小高区の塚原行政

区長・今野由喜さんに団体「つながっぺ南相馬」を立ち上げてもらい、JVCが側面支援する形にした。サロンの常駐スタッフも現地で雇用。我々はこのでも裏方に徹することを心がけた。

サロン開始当初は、お互い隣人の顔も知らない状態だったのが、今では仮設で欠かせないコミュニケーションの場となっている。仮設住宅自治会、社会福祉協議会と連携を取り、仮設全体を見守る体制を整えることもできた。

しかし、やっと慣れた仮設での生活も、来年3月末には除染がほぼ終わり避難指示も解除され、帰還開始の予定だ。また、それ以前に、20km圏外に建設が進む災害公営住宅への移動が始まっている。

今ある家を修復、あるいは新築しての帰還を考える人、そのどちらも決めかねている人、もう戻らないと決めた人、様々にこの先の計画を立てなければならない。往々にして、息子世代が避難して

いて支援を得られない高齢世代が計画を立てられずにいる。一定の層が仮設に取り残されると予想されるなか、サロン活動はますます重要になってくるだろう。

復興の主人公は 地元住民

復興にはまだ長い時間がかかる。それは行程表を作って「ここまで」と言えるものではない。原発事故は、放射能汚染だけではなく、コミュニティを分断し、家族が離ればなれに暮らさざるを得ない状況をつくりだした。建物は再建できても、人々の絆の再建には穏やかな時間と状況が必要だ。

震災から4年を迎え改めて思うのは、復興の主役は地元の人々ということだ。地元の人たち自ら復興を行うときの、きっかけや支えになることが重要だと改めて感じる。これからもJVCは黒子に徹し、南相馬の人たちの回復力を応援していききたい。



気仙沼市。住民が動く。
私たちも「外部」ではいられない

気仙沼事務所現地代表 岩田 健一郎

津波ですべてを失った住民に迫る高台移転という現実。その実現に向け、震災以前の「行政任せ」ではない住民参画が増えてきた。一方、被災地の活動主体は住民だからと「住民任せ」を基軸にしていたJVCが気づいたのは、人口減と高齢化への取り組みは日本社会と向き合う課題である以上、もはやJVCは「外部」者ではいられないということだった。

進まぬ住宅再建

「地元に戻りたい。戻ってワカメや昆布の養殖をやりたい」

自らの集落の高台に移転することを望んだ70代男性が常々口にしていた言葉である。

JVCは足かけ3年にわたり、その男性とともに高台移転事業に取り組んできた。移転先の造成がようやく完了し、住宅の再建を控えた矢先、その男性は帰らぬ人と

なった。仮設住宅が終の棲家となった住民の無念さを痛切に感じざるを得ない。

住宅再建の遅れにより、気仙沼市の応急仮設住宅および民間賃貸（みなし仮設）の入居者数は未だ8000人以上にのぼる（注1）。その背景には、安全な居住地を確保するためのかさ上げや高台の造成工事に多大な時間を要しているところがある（注2）。地元を離れて早期に住宅を再建するのか、時間がかかっても集落に戻るのか。この

4年間に住民は苦渋の決断を迫られてきた。

一度、集落の高台への移転を選択しても、宅地の引き渡しまでにかかる3〜4年を待つことは容易ではない。高齢者にとっては尚更だ。「早く親を安心させてやりたい」「娘夫婦と一緒に住もうと説得された」。それぞれの理由で、一人、また一人と高台移転を断念してきた。

資金繰りの問題で高台での住宅再建を諦め、災害公営住宅の入居を選択する住民も現れ始めている。住民を取り巻く状況は厳しく、

「災害公営住宅に入って賃料を払うことも大変だ。お金のかからない仮設住宅にこのまま住み続けたい」という声が聞こえてくるほどだ。

膨大な建設需要の影響による建設コストの高騰がさらに追い打ちをかける。災害公営住宅への入居を余儀なくされるこうした傾向が続けば、高台に更地が広がる可能性も否定できない。

住民自ら取り組む高台移転

JVCは2011年8月に気仙沼事務所を開設して以来、市内



大浦地区高台移転の造成地を見学する



造成地の模型を使いながら「まちづくりルール」について検討を進める小々汐（こごしお）の高台移転希望者たち

JVC気仙沼事業の活動の変遷

2011年3月～7月	2011年8月～2012年3月	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
気仙沼市社会福祉協議会 災害ボランティアセンターの運営支援	気仙沼事務所開設 鹿折地区、特に四ヶ浜地域に 対象を絞り活動を開始	四ヶ浜での生活支援 戸別訪問と個別ニーズへの対応、仮設住宅での冬対策など 養殖業者の生業支援 浦島小学校支援 人が集う「場づくり」支援 「定期市」の開催 買い物支援および 交流の場づくり 地元伝統芸能支援 避難所支援 大規模開発事業のウォッチ	高台移転のサポート 専門家派遣 四ヶ浜での生活支援 戸別訪問、養殖業者の生 業支援など 浦島小学校支援 児童や地域住民などの 交流の場づくり 「場づくり」支援 仮設住宅住民や在宅住民 対象の交流会の開催など 仮設住宅支援 住環境改善など	中期方針 （2013年度～2015年度）を策定 【生活再建を支える】 高台移転のサポート （専門家派遣） 【浦島地区振興会の運営支援】 浦島小学校施設利用の検討 養殖体験ツアー開催など 【仮設住宅支援】 交流の場づくり、住民自治支援、 心身の健康維持活動 【在宅住民支援】 戸別訪問、交流の場づくり	【生活再建を支える】 高台移転のサポート （専門家派遣） 【浦島地区振興会の運営支援】 浦島小学校施設利用の検討 養殖体験ツアー開催など 【仮設住宅支援】 交流の場づくり、住民自治支援、 心身の健康維持活動 【在宅住民支援】 戸別訪問、交流の場づくり 【集落の再編に関する支援】 住民間の協議の場づくり

折地区、特に四ヶ浜地域（大浦・小々汐・梶ヶ浦・鶴ヶ浦の四集落の総称）（注3）において支援活動を継続してきた。地域の状況とニーズの変化に柔軟に対応しながら様々な活動を展開する一方で、12年4月には住民からの要請を受けて、高台移転の住民協議会に建築・まちづくりの専門家を派遣する事業を開始した。以後3年間、住民・専門家・JVCが一丸となり、造成設計の検討やまちづくりルールの策定、共同建設方式の導入に取り組んできた。

高台移転はまさにゼロからのまちづくりである。協議会の発足に始まり、移転先の選定、地権者交渉、宅地の割り当て、さらには電柱やごみ集積場の配置決めに至るまで、すべて住民主導で進められる。時には住民と行政との間で激しいやり取りが交わされる。

住民個々の利害に関わるため、合意形成にも相当の労力を要する。たとえ住民の要望が十分に反映さ

れた造成地ができたとしても、移転希望者のすべてが無事に住宅再建を果たせるか否かは予断を許さない。それでも住民の一人は言う。「震災前までは結局のところ行政任せだった。高台移転は、自分たちのまちを自分たちでつくるという一つの挑戦だと思っている」

進行する 人口減少・高齢化

震災以前より緩やかに続いてきた気仙沼市の人口減少・高齢化は、今回の震災によってますます進行し、震災後も歯止めが効かない状況にある（7ページ表参照）。

JVCが活動する四ヶ浜も例外ではない。四ヶ浜では震災前およそ240世帯が生活を営んでいたが、被災住民が離散したために約70世帯にまで減少した。近い将来に高台移転などの住宅再建事業によって住民が地元回帰を果たし、約140世帯まで回復する見込みではあるが、同地域が限界集落化

する恐れは否めない。12年度には地域で唯一の教育機関であった浦島小学校が閉校した。

こうした状況に危機感を募らせた地域住民によって、13年4月に「浦島地区振興会」が組織され、JVCも同組織にサポーターとして参画することとなった。振興会発足後、JVCは住民と協働で、交流人口の拡大を図るべく地域資源を活かしたツアー事業に取り組んできた。また、地域活性化の拠点として学校施設を活用することを目指して、住民の意向調査や先行事例の視察、勉強会などを実施してきた。

一方で「他人任せ」の 雰囲気も

しかしながら、振興会発足後からの2年間に廃校施設利用の検討は思うように具体化していない。住民は「生活再建に忙しく、考える余裕がない」という。JVCが地域振興に資すると判断した活動

◎注1…応急仮設住宅の入居者数は5,986人、民間賃貸（みなし仮設）の入居者数は2,225名（平成27年2月末日現在/気仙沼市）。



住民によるワカメの解説に熱心に耳を傾けるツアー参加者たち。ツアーを通じて、豊富な資源を有する四ヶ浜の魅力を発信している。震災の教訓を伝えることもツアーの重要な目的の一つとなっている



浦島地区振興会が主催したセミナーの一場面。当日は、他地域における廃校活用の先行事例について学習するとともに、浦島小学校の施設利用に関するアイデアを出し合うワークショップを行った

気仙沼市の人口・高齢化率の推移

2040年、気仙沼市の人口はピーク時(1980年)の半分以上になることが予測されている。また同年には、老年人口が生産年齢人口を上回り、高齢化率は約47%に達する見通しとなっている。

	1980	1990	2000	2010	2014	2040
総人口	92,246人	87,982人	82,343人	73,489人	68,232人	42,656人
年少人口(0~14歳)	22,059人	16,421人	11,999人	8,746人	7,125人	3,152人
生産年齢人口(15~64歳)	61,700人	59,583人	51,889人	42,004人	38,622人	19,247人
老年人口(65歳以上)	8,465人	11,978人	18,430人	22,600人	22,485人	20,257人
高齢化率(%)	9.2%	13.6%	22.4%	30.6%	33%	47.5%

◎資料:総務省「国勢調査(各年10月1日時点)」, 2014年(3月末)の数値は住民基本台帳人口より。
推計人口は、「日本の地域別将来推計人口(平成25年3月推計)」国立社会保障・人口問題研究所より。
◎1980年から2000年までの人口については、合併前の気仙沼市、唐桑町、本吉町の合計。

を提案する際にも、「今はまだその時期ではない。生活再建を果たして落ち着いた時にやろう」という言葉が返ってくることもしばしばだ。
確かに生活再建は最優先課題である。ただ、危惧を覚えるのは、

震災によって高まった地域づくりの機運を捉えてまさに今そうした取り組みを始めなければ、単なる先送りに終わるのではないか、ということである。住民の間にはどことなく「他人任せ」の雰囲気がある。
一方、JVCはどうか。活動が思うように進まない時、自分たちは「外部」であり、取り組みを取捨選択する主体はあくまで住民であるからやむを得ないと考えてきた。いわば「住民任せ」にしてきた。

JVCはもはや「外部」ではない

しかし、果たしてJVCは本当に「外部」なのであるか。人口減少と高齢化に悩む四ヶ浜の姿は、日本の地域社会の縮図である。四ヶ浜の行く末を思い描き、その望ましいあり方を模索することは、JVCにとっても他人事ではない。JVCもまた住民と同じ地平に

立っているはずだ。

地域の抱える問題を自らが取り組むべきこととして捉えること自体が最も大きな課題であるという点において、住民とJVCは共通している。

東日本大震災はかねて日本社会が内包してきた問題を誰の目にも明らかな形で顕在化させた。今回の震災によって問われているのは、「自分たちの社会のあり方は自分たちで決める」ということに他ならない。いかに多くの人が、目の前にある課題の解決を他人任せにするのではなく、自らの課題とすることが出来るか。そこに復興の鍵がある。

このことは、私たち自身の社会との向き合い方の問題と通底している。私たちは決して「外部」ではないのだ。

◎注2…災害公営住宅約2,200戸の整備計画数に対して完了数75戸、防災集団移転(いわゆる高台移転)966区画に対して完了数は71区画となっている(2015年2月末日現在/気仙沼市)。◎注3…別名、浦島地区と呼ばれる。

スタッフの ひとりごと

数字に魅入られる日々

副代表 磯田 厚子



イラスト かじの倫子

ここ数年、ハマっているものがある。通称「ナンプレ」、ナンバープレイス、あるいは数独(すうどく)とも言われている“3列×3行”が縦横3枠並び、1～9の数字を入れるあれだ。新聞や週刊誌のパズルにもよく登場しており、知っている方も、私同様にハマっている人も多いと思う。

始めは何気なくやっていたが、だんだん面白さにハマっていった。一時期は、「重ね合わせナンプレ」や「5×4ナンプレ」などもやっていたが、結局シンプルな3×3の9

枠タイプに戻った。これが一番奥深いと思う。ナンプレの本はたくさん出ているが、私が一番好きなのは世界文化社のものだ。各級を制覇し、今はもっぱら超上級をやっている。

何が面白いのか。「各列各1行に数字の1～9が各1回しか入らない」というとてもシンプルな解でありながら、そこに至るまでに、何重かに隠された糸口に気付く妙味。ひとたび気づくと、するすると一気にほどけていく美学。

「答えがあるからじゃないの？」

との声も聞こえてきそうだが、そう単純でもないと思っている。囲碁にも似た(やったことはないけど)何手か先を読む推測の面白さがある。推測方法もいろいろあり、これを駆使して、また新しいルールを見つけるのもワクワクする。

でも、一番の楽しみは、日ごろややこしいことが多いから、やっぱりすっきりしたいのかもしれない。ハマりすぎないように、ナンプレ本は持ち歩かない。毎晩、ベッドに入って寝る前に2～3問解くのが至福の時…。

いまさら聞けないQ&A Vol.01

読者のみなさんからの質問募集中!!
会員担当:宮西までお寄せください。

Q 南アフリカはHIV陽性者の数がなぜ世界最多になってしまったのですか?

A 南アフリカ(以下南ア)のHIV陽性者数は90年代半ばにはすでに世界最多になっていました。ここでは主な要因として2点をとりあげます。

ひとつ目は、一般的に「移動」と「貧困」によってHIV感染は広がるとされており、南アもこれに該当します。アパルトヘイト政策下で形成され今も続く「出稼ぎ社会」では、例えば働き盛りの男性は数ヵ月も鉱山などで危険な仕事に就き、大きなストレス下に置かれます。そのなかで、「貧困」を背景とした女性との売買春を含めた

パートナー以外との性交渉が増え、感染し、家に戻って自分のパートナーにも感染させてしまうのです。当然、妻から夫への感染ケースもあります。ふたつ目は、アパルトヘイト撤廃後の復興期にあって他に取り組む課題も多く、政府によるHIV/エイズ対策が遅れたことも感染拡大に拍車をかけました。このように、南アではその社会構造がゆえに感染が広がったのです。

しかし、2000年代以降「当事者運動」がこの流れを変えます。2001年、エイズ治療薬(ARV)の安価なジェネリック薬の輸入を

求める南ア政府とそれに反対する製薬会社とのWTOを舞台とした裁判の法廷の場に、HIV陽性者自身が立って薬の必要性を訴えました。これがそれまでの裁判の流れを変え、輸入を認める南ア政府の勝訴へと結びついたのです。その後、南アのHIV/エイズ対策は、ARVの無料支給も含めて改善されてきました。ここ数年は、新規感染者数が年々減少する一方で、人びとが「エイズとともに生きられる」ようになり、結果としてHIV陽性者数が増加しています。

(南ア事業担当 渡辺 直子)

実際には、自宅に食べ物がなく、副作用が強いARVが飲めないなどの実態があります。エイズ対策においては、陽性者個々人の具体的な課題をとらえ、それを活動や政策に反映させていくことも同時に必要です





2015 JVC STAFF

世界の10の国・地域で活動する
JVCのスタッフに
今年度の抱負を語ってもらいました。

AFF 2015 JVC STAFF 2015 JVC STAFF 2015 JVC STAFF

東京事務所



前列6名左から: 大村、渡辺、谷山博史、樋口、小野山、山崎 / 2列目5名左から: 寺西(白いシャツの女性)、並木、宮西、加藤、河村(、渡久山)
3列目6名左から: 白川、平野、細野、長谷部、池田、稲見



磯田 横山 下田
橋本 石川 谷山由子
藤屋

谷山博史 (代表理事)
今後の厳しい活動に備えて、家中陽の当たるところに野菜を植え、町内会の仲間を増やす。

磯田厚子 (副代表／非常勤)
毎年あれこれ思うけど実現できない。抱負の「負」は背負うという意味らしい。重い!

長谷部貴俊 (事務局長)
14年度目標なのに中途半端に終わった体幹トレーニングを週3回は行う。

細野純也 (事務局長次長)
サッカー文化のさらなる深淵をのぞきに、下部リーグ(都リーグ2部とか)の観戦へ。

山崎 勝 (カンボジア事業担当)
早く寝る(最近、朝は早く目が覚めてしまうので)。

平野将人 (ラオス事業担当)
年間100日禁酒とボクシングジム月間100ラウンドで健康を。

下田寛典 (タイ事業担当)
世界の平和を家庭から。平穏を維持するたゆまぬ努力と、ごめんなさいを言う勇氣を。

渡辺直子 (南アフリカ事業担当)
自宅に高くそびえ立つ「積ん読」本をちゃんと読む一年にしたいです。

小野山亮 (アフガニスタン事業現地統括)
日々チエクササイズ。

加藤真希 (アフガニスタン事業担当)
朝の出勤前の時間を充実させる。本を読んだり絵を描いたり!

樋口正康 (アフガニスタン事業担当／南タイ事業担当)
ワーク・ライフ・バランスの改善!!

池田末樹 (経理／イラク事業担当)
JVC軽音部の紅白出場!どんな楽器でもOK。参加希望の方、連絡下さい!!

中野恵美 (イラク事業補佐／非常勤)
イラク事業チーム補佐、PTA副会長、母親の3足のわらじをかつこよきはきこなす。

寺西澄子 (コリア事業担当)
肩こり腰痛に愛されぬよう体操&散歩で予防に努める。運動経験皆無の人生に変化を。

並木麻衣 (パレスチナ事業担当)
母親になった旧年。パレスチナと日本のママたちをつないで共感の輪を広げたい!

白川 徹 (震災支援担当・南相馬)
連れに散々言われている禁煙を実現。今年こそTrial&ErrorではなくTry&Successで!

谷山由子 (震災支援担当・南相馬／イラク事業)
(コメントなし)

横山和夫 (震災支援担当・気仙沼)
仕事も遊びも、もっと楽しむ。

藤屋リカ (海外事業担当)
未成年生まれ。迷える同年代とMKB(マキバ)48を結成、穏やかに群れつつ人生を語る。

大村真理子 (広報担当)
職員2年目。多くの人が気軽に楽しく参加できるチャリティ企画を沢山提案します。

宮西有紀 (会員・支援者担当)
食生活の改善!まずは、ゆる〜く「ときどきお弁当」を実践する。

稲見由美子 (経理／労務)
毎日適度な運動!そして月に一品、パレスチナ刺繍製品を購入します!

河村由美子 (ファンデレイジング担当)
JVCの強みを見極め、より多くの方に支援・参加していただける活動を展開します。

石川朋子 (コンサート事務局)
己の欲せざる所は人に施すこと勿れ。

橋本貴彦 (カレンダー事務局)
カレンダーの売上げに貢献できるくらいに、バグパイプの腕を磨く!

カンボジア事務所

坂本貴則(現地代表代行)
カンボジア内で作られている加工品を
日々の生活の中で注意深く発掘したい。

ポー・コン(農業プロジェクトリーダー)
フードセキュリティ研修のガイドライン
作成のため、データ収集をきちんと行う。

ロス・ボンロック
(農業プロジェクトフィールドスタッフ)
農家のフードセキュリティを高めるよう
努力し、他の村・人にも成果を広げたい。

モーン・ソカー
(農業プロジェクト農場担当)
農場で20種類以上もの種を自家生産し、
農場用や農家に分けられるようにしたい。

パート・ピー
(環境教育プロジェクトフィールドスタッフ)
小学校やその周辺にある植物を児童たち
と調べ、結果を反映した教材を作りたい。

ソム・ネアリー(TRCトレーナー)
去年よりも責任感を持って仕事し、大学
生への講座の内容をより良くしたい。

皆嶋 円(プロジェクト調整員)
クメール語の習得に励み、スタッフとの
コミュニケーションの質を上げたい。

ミエン・ソマツチ
(農業プロジェクトフィールドスタッフ)
農家の成功体験や実例などを数年後に本
にまとめられるよう、今年から準備したい。

コーン・シキム
(農業プロジェクトフィールドスタッフ)
農家さんの食卓が豊かになり、毎日楽しい
食事が迎えられるよう精一杯努力したい。

セン・テロアット
(環境教育プロジェクトリーダー)
小学校の先生や子どもたちに環境の大切
さに気づいてもらえるよう努力したい。

レン・ソテット
(環境教育プロジェクトフィールドスタッフ)
先生が環境や生態系についてより理解で
きるようなスタディーツアーを提供したい。

イン・コック・エン(TRC司書)
最近立ち上がったTRCホームページを通
じて利用者が増えるように努力したい。



サ・シネン ソテット



前列6名左から: ヘン・チェンガウ、ロス・ボンロック、ダン・ソン、パート・ピー、チン・ブンヒエン、
モーン・ソカー／後列12名左から: イン・コック・エン、(省く)セン・テロアット、坂本、(萩原: 前イ
ンターン)チャン・チャンレアスミー、プム・ブンルウン、コーン・シキム、ポー・コン、ケン・
ポーン、(太田: 前スタッフ、)皆嶋、(山崎、)ミエン・ソマツチ、パオ・リッツ、ソム・ネアリー

ヘン・チェンガウ
(プノンパン事務所総務担当)
カンボジア人同士やカンボジア人と日本人
がもっと仲良くなれるよう働きかけたい。

ケン・ソポーン
(ジェムリアップ事務所総務担当)
会計・総務の仕事が忙しくない時に農村や
学校を訪問し、活動の理解を深めたい。

プム・ブンルウン(運転手/総務補佐)
JVCが評価され、長く活動できるようよ
うに運転手として仕事の補助をしたい。

ダン・ソン(警備担当)
みんなの幸せを祈っています。

チャン・チャンレアスミー
(プノンパン事務所会計担当)
新人なので早く仕事に慣れ、会計・総務担
当のスタッフとの協力関係を深めたい。

パオ・リッツ(運転手/総務補佐)
安全に気をつけて仕事に慣れたい。近い
将来、日本に一度は行けることを願う。

チン・ブンヒエン(警備担当)
仕事をきちんと全うしたい。総務と協力
し、JVCの対象者の役に立ちたい。

サ・シネン(清掃担当)
娘夫婦が現在生活しているアメリカに移住
し、娘夫婦と生活できるよう準備をする。

南アフリカ事務所



左から: フィリップ、富田、モーゼス、ドゥドゥ、アベル

アベル・コマネ
(有機農業トレーナー/業務委託)
2年前に家族のために建てはじめた家
を屋根ふき終え、年内に完成させる。

富田杏子(プロジェクト・マネージャー)
長く離れていたアカデミックに挑戦。早
速気になる講座に登壇。勉強嫌いは変
われるか?

ドゥドゥ・レンガビンデ
(プロジェクト・コーディネーター)
健康的な生活を維持するため、ジムで渡され
ているスケジュール通りに通い続けたい。

モーゼス・シャバニ(会計担当)
年内に経理の専攻で大学卒業資格を
取得する。

フィリップ・マルレケ
(プロジェクト・フィールド・アシスタント)
今年こそ絶対に運転免許を取得する!

スーダン事務所



左から: モナ、今井

今井高樹(現地代表)
スーダンで9年目。今までとは
一味違うことを始めたい。

イスマイル・ジュマ
(カドグリ事務所チームリーダー)
英語でもっとコミュニケーションが
できるようになる。

サラ・モジヨ
(フィールド・オフィサー)
スマートフォンを買って、WhatsApp
で友だちをたくさん作りたい。



サブリ イスマイル



サラ

モナ・ハッサン
(プログラム・コーディネーター)
地中海のサルディニア島で
優雅な休日をも!

サブリ・アルブフラ
(フィールド・オフィサー)
家族が持っているウシの世話をして、
ちゃっかりウシの持ち主になる。

エルサレム事務所



左: 今野、右: 金子

今野泰三(パレスチナ事業現地代表)
地元の人々の良さを引き出し、関わる
人々すべてが楽しめる支援活動を目指
したい。

金子由佳
(パレスチナ事業現地調整員)
①パレスチナの現状を日本の人々に伝
える。②ガザ漁港で取れた魚で手巻き
寿司をつくる。

在タイ



森本薫子(現地側コーディネーター)
ウボンラチャターニ県と
福島つながりがより強く。
内容はT&Eでチェック!

気仙沼事務所



左から: 伊藤、岩田、石原

岩田 健一郎(気仙沼事務所現地代表)
心穏やかに、ゆったりと。

石原 靖士(震災支援担当)
2 分前行動を徹底する。

伊藤 祐喜(震災支援担当)
毎月一時間以上ランニングする。

アフガニスタン事務所



前列男性4名左から: ミル・ジャマール、ナビ・ジャン、ジャハン・ミール、リアーズ・アフマッド
後列女性3名左から: ファティマ・カディム、ママナ、ウグマ
後列男性5名左から: シャー・モハンマド、ロトフル、モハンマド・ラヒーム、ジャナット・グル、フルシード

モハンマド・シャプール・サフィ
(医師、医療事業責任者)
人々の生活には平和がかかせません。
2015年が平和で発展の一年になりますように。

ウグマ (簡易診療所助産師)
2015年がアフガニスタンにとって平和で
穏やかな一年になることを願います。

ジャハン・ミール (医師、診療所長)
国が平和になり、発展し、子どもの教育
が向上することを願います。

モハンマド・ラヒーム (診療所看護師)
アフガニスタンにはまだ支援が必要で
す。日本の様々な分野での協力を期待
します。

フルシード (ワクチン接種担当)
国民が平和のために取り組み、子ども
たちの教育に力を入れて明るい未来
を築きたい。

リアーズ・アフマッド (診療所薬局担当)
私たちの国が平穏になることを願っ
ています。

デラワール (守衛主任)
町の近所の子どもたちに無料の授業
を始めようと思っています。

アブドゥル・ワハーブ
(医師、地域保健責任者)
急いで決断してしまうのではなく、皆で
合意を得るようにしよう。

ファティマ・カディム (地域保健担当)
国に平和が訪れることを願います。

ママナ (診療所助産師)
新年が平和で前向きな一年となること
を願っています。

グラライ (診療所検査技師)
2015年にはアフガニスタンに平和が
訪れ、子どもたちが学校に行けること
を望みます。

ザマスラー・メムラワル (守衛/運転手)
農業について学び、国を緑でいっぱい
にしたい。

アシール・モハンマド (簡易診療所守衛)
国にとって平和で健康な一年になります
ように。良い保健サービスを提供したい。

アジマール・クワラム (教育支援担当)
新しい年とは真っ白な本であり、ペンは私
たちの手の中にあります。美しい物語をつ
づけるチャンスが私たちにはあるのです。

イザトゥッラー (守衛)
平和が訪れ、自分の村で暮らせますように。



ファザル・ハック



ワハーブ



グラライ



アブドゥル・ラジーク



ザマスラー



左から: アシール・モハンマド、サルダル・ワリ、
(ロトフル) シャハブディン



左: ハビブラフマン
右: カン・ミル



左: バスミナ
右: ワシマ・ババケルヒル



前列4名左から: アジマール・クワラム、
サイード・サファラガ、(ナビ・ジャン) イザトゥッラー
後列6名左から: トラブ・ハーン、デラワール、
モハンマド・シャプール・サフィ、イサヌラ・ハタック、
アガ・グル・パチャ、サビルッラー・メムラワル

ナビ・ジャン (守衛/運転手)
2015年は子どもの教育をもっと充実
させたい。

サビルッラー・メムラワル (治安/総務)
腐敗のない国をつくるには清らかな心が必要
で、その鍵は両親と教師にある。家族のあ
り方について本を書きたい。

ジャナット・グル (診療所守衛)
祖国に貢献するために生きたい。

イサヌラ・ハタック (経理担当)
大学の卒業論文が審査に通り、晴れてその
お祝いのパーティに出席したい。

ミル・ジャマール (簡易診療所薬局担当)
アフガニスタンで暖かな平和を見たい。

アブドゥル・ラジーク (守衛)
国の平和が私の夢です。そしてより良
い発展を望んでいます。

アガ・グル・パチャ (守衛/運転手)
家族のために自分の家を建てたい。

バスミナ (調理担当)
子どもたちが教育をきちんと終えられ
ますように。

シャハブディン (簡易診療所守衛)
診療所で誠実に仕事して人々にサービ
スを届けたい。

ハビブラフマン (診療所守衛)
今年は私の日々の生活が平和である
ことを願っています。

サルダル・ワリ (医師、簡易診療所長)
アッラーに任せ、人々のためにより良
い医療を提供したい。

ロトフル (診療所検査技師)
この素晴らしい国の平和を望みます。能力
強化のため日本で学ぶ機会がほしい。

ファザール・ハフ (ワクチン接種担当)
より良い仕事をできるように色々と学
びたい。

サイード・サファラガ (調理/総務担当)
子どもが良い教育を受けられる機会と家族
の平和な生活を望んでいます。

シャー・モハンマド (運転手)
汚職のないアフガニスタンを望んでいます。

トラブ・ハーン (経理補佐)
将来は大学の先生になりたい。

ワシマ・ババケルヒル (地域保健担当補佐)
医療を学び、将来は医者になりたい。

カン・ミル (診療所庭師)
色とりどりの花と景色に包まれた国を
見たい。

ラオス事務所



後列8名左から: フンパン、チャイヤン、レノル、シーサワン、アロニー、ソムソン、
センスリー、ホーム/前列4名左から: 林、ヴィサイ、オーワンティン、ホンケオ



渡久山

ヴィサイ (森林/インターン)
森林チームの業務で村人への説明が
上手できるようになる。

ホンケオ (森林/意識啓発活動・
自然資源管理担当)
恋人と家を手に入れる!!

林 真理子 (現地代表)
30歳過ぎて増えた脂肪をいっくら筋
肉に変える、今年こそ…。

フンパン (プロジェクトコーディネーター、
農業・農村開発チームリーダー)
今年も娘に会いにベトナムへ行く。オンラ
インで勉強しているコースを修了する。

オーワンティン
(農業/ラタン植栽担当)
お金を稼いで大学に進学する。

チャイヤン
(森林/土地利用、GIS担当)
妻とお金を貯めて車がほしい。英語が
うまくなるように頑張る。

センスリー (農業/井戸・給水担当)
生まれたばかりの娘の世話をもっとでき
るように。嫁にバイクを買ってあげる。

渡久山 舞 (新任現地駐在員)
人生を楽しむ!
"ラオスマスター(初級)"をクリアする。

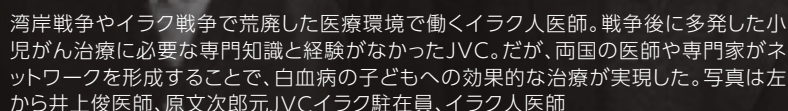
シーサワン (農業/家畜担当)
英語を上達させる。週末に通っている
大学院のコースを頑張る。

レノル (森林/法律研修担当)
100kg以上ある今の体重を
95kgまで減らす!

ソムソン (農業/インターン)
論文を完成させて、農学の学位をとる。

ホーム (運転手)
息子に警察官になってほしい。

アロニー (会計・総務担当)
ルアンプラバーンで暮らす66歳の母
親とサワナケートと一緒に暮らしたい。



TRIAL&ERROR No.315 | 2015 春 12



2004年4月以降治安状況が悪化。JVC担当者はバグダッドから隣国ヨルダンに拠点を移して支援を継続。写真は、バグダッドの病院に届けた医薬品(2005年)



イラク・バグダッド市の「子ども福祉教育病院」で治療を受ける小児白血病の女の子(2004年当時)当時は、米軍による大規模な空爆などの影響もあり、現地の治安情勢が悪化。日本人人質事件が起きた時期でもあった

イギリスなど海外で教育を受けた医師も多く、日本と差がない医療水準にあったと想像されます。平和が維持されていれば、今頃は進んだ医療技術を受容できたでしょう。しかし、イラン・イラク戦争、湾岸戦争、イラク戦争により、その医療環境が荒廃してしまったのです。

03年6月、JVCの派遣で小児がんの医療調査のためにイラクを初めて訪れた井下俊医師は、医師たちは高い知識レベルを有するのにお粗末な抗がん治療しか行われていない、その不釣り合いな状態にとっても戸惑ったと言います。

小児がんの医療支援に必要な高度な専門的知識と経験のないJVCには難しい面もありましたが、現地の人々の声に耳を傾け、日本の医師や専門家との協力関係を作ること、医薬品支援などを通じ、白血病の子どもへの治療を効果的に行うことが出来ました。

一方、支援の成果を医学的に評

価する難しさにも直面しました。医薬品支援の額や量は計れても、支援による「(治療などの)成果」を計ることは難しいのです。

しかし井下医師の努力により、イラク人医師が、がん治療後の5年生存率など治療の指針となるデータを正確に管理し評価の指標を作れるようになりました。

厳しくとも 医療支援は続ける

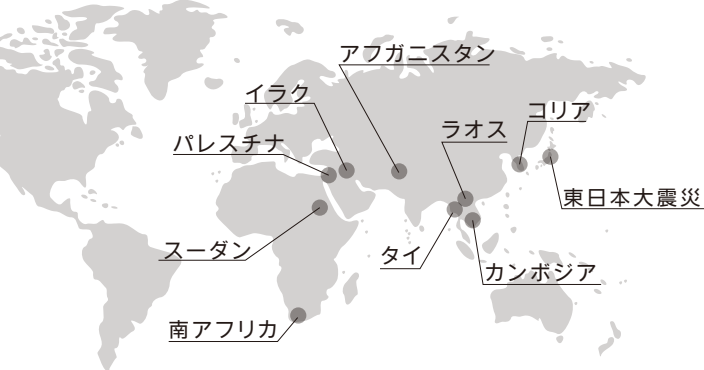
社会的環境が整った日本とは違い、イラクでは、治安上の理由での通院困難、経済的理由での治療中断、また、医療従事者の病気や治療への知識の欠如による治療拒否があります。病院の施設や、感染症対策に関する病院職員の意識なども、日本での状況とは大きな差があります。

現地の治安悪化も支援活動に大きく影響しました。07年以降、イラク第2の都市モスルでは武装勢力が活発化。09年12月にはキリス

ト教の教会を狙った爆破事件が起こり、キリスト教徒の医師は脅され勤務が不可能になりました。しかし、残った医師たちの「支援を止めてはいけない」との思いで活動は続けられました。

一時期、この支援活動を兼任していた谷山博史JVC代表は、こうして確立した医師同士のつながりがJIM-NET最大の財産だと、この医療活動を振り返ります。

イラクの医療環境は依然厳しく、今後も支援が必要です。JVCは、専門知識を要するがん医療をJIM-NETに任せ、共同事業という形で医療支援は13年度で終了しました。今後は、JIM-NETが医師とのネットワークや専門性を活かした支援を継続し、JVCは、JIM-NETの会員団体として運営などで側面支援を続けます。より経験や強みを活かせる分野でイラクの人々を支援していきます。



JVCは現在、10の国・地域で活動しています。

プロジェクト一覧

1月後半～3月前半

タイ

農村派遣研修／日・タイ経験交流／
医療支援（タイ南部）

◎農村派遣研修：2015年に派遣する第15期生の募集を開始した。（下田）

◎日・タイ経験交流：原発建設計画が進むタイと、福島原発事故の経験と教訓を発信していくことを目的に経験交流を続けている。国連防災世界会議に合わせて3月8日からタイの消費者団体と環境保護に携わる活動家の2名を招聘し、福島を訪問した。いわき市や南相馬市、浪江町、宮城県丸森町などを訪問し、原発事故の影響と再生への取り組みを学んだ。参加したタイ人からは、「原発立地地域への経済的な利潤も、ひとたび事故が起きてしまえば取り返せない被害が起こってしまう」との声が

聞かれた。タイでの原発建設計画や今回の訪問での学びを伝える報告会を3月14日に東京で開催した。

（下田）

◎タイ南部での医療支援活動：タイ南部バンガー県でビルマ人労働者に対する救急医療支援、健康教育、健康保険証発行支援などを実施している。2月中旬に、ビルマ人移民学校生徒83名を対象に家族計画や早期結婚について考える保健教育を提供した。13名に緊急医療支援を実施し、その内1名には健康保険



福島訪問での学びをタイ社会にどう還元していくかを話す
タイの消費者団体スタッフ

証の発行を補助した。

ビルマ/ミャンマー国内のタニンダリー管区の土地収奪問題に関する情報収集、およびシャン州の農家の暮らしを視察した。日系企業が絡むティラワ経済特区開発での土地問題に関しても聞き取りを実施した。（樋口）

カンボジア

生態系に配慮した
農業による
生計改善／環境教育／
資料・情報センター



活動村でJVCの活動を説明するスタッフ

◎生態系に配慮した農業による生計改善（CLEAN）：農業支援の活動説明会を活動村の農家を対象に9回実施し、JVCと活動する意欲のある農家を募った。その結果、これまでに約180名の農家が取り組んでみたいと意思を表示した。

◎環境教育（EE）：小学校2校で植林活動を実施し、児童が地域の自然の大切さについて学んだ。また、次のフェーズに向け新しい対象学校を選定するために12校の学校を訪問し状況調査を実施し、6校を選定した。

◎資料・情報センター：コンサエン村に開設した地域資料センターと、図書の管理やセンター運営について議論をした。加えて農家でも読みやすい資料を100点ほど提供した。

◎技術学校：トヨタカンボジア社から奨学金を受けられる生徒が決定され、奨学金授与式が開催された。（坂本）

南相馬

仮設住宅での
サロン運営



西町仮設住宅サロンでのラジオ体操の様子。普段サロンに来なくてもラジオ体操には参加する住民もできた

引き続き地元NPO「つながっぺ南相馬」と協同で南相馬市鹿島区にある仮設住宅4カ所におけるサロン活動を実施している。前期のサロン管理者間の会議において仮設住宅住民の運動不足を心配する声が多く聞かれたため、運動の機会を作ることが心がけた。西町仮設住宅サロンでは、1月から毎朝のラジオ体操を開始。加えて、アキレス腱を伸ばす健康器具を各サロンに設置した。サロン管理者主導で毎日住民に利用してもらっている。また、サロン管理者・JVC間で2014年度の活動を振り返る会議を行い、翌年度の活動方針を定めた。

仮設住宅に関わるアクター間の連携を深めるための「南相馬こころのケア連絡会」を、昨年度から引き続き地元NPO「みんなのとなり組」と共に開催した。参加者も以前よりも増え、活発な議論が交わされた。（白川）

パレスチナ

学校・地域保健事業
(東エルサレム)／
栄養失調予防事業
(ガザ地区)



学校保健委員会の生徒による、
幼稚園児への手洗い指導

◎学校・地域保健事業：1、2月は、これまでトレーニングを提供した学校保健委員会、保健担当の教師、ボランティア青年による救急法委員会の活動のフォローアップと波及効果の確認に力を入れた。特に、学校から学校へ、生徒から生徒への波及効果を狙った保健委員会の活動は、JVCが支援しない学校にも広がり、学校や自治政府教育省も力を入れるようになった。また、元WHOガザ事務所代表の神馬征峰教授、パレスチナ史を専門とする臼杵陽教授、アーユス様の職員3名、藤屋リカ大学講師が、事業視察に訪れた。

◎栄養失調予防事業：昨年夏の戦争直後に再開した本事業は徐々に軌道に乗り、昨年4月から2月末までに、1,136人の子どもの栄養状態の検査、調理実習76回を含む188回の栄養教育セッション、1,455人の母親への家庭訪問を通じたカウンセリング、30人の女性ボランティアの育成を行った。結果、貧血・くる病・栄養不良と診断された子どものうち6割以上で状態が改善した。女性ボランティアとカウンセリングを受けた母親も、昨年度に比べて知識と行動の面で6割から9割の向上が見られた。ボランティアの多くは自分たちの活動に誇りを持ち、自信にあふれている。(今野・金子)

調査研究・政策提言

外務省・JICAとの政策協議／各種提言

◎2014年度第3回NGO-JICA協議会(1月19日)：標記会議に平野(コーディネーター)、高橋、渡辺が参加。RBA(Rights Based Approach)に関する議題において、JVCの活動から事例紹介を行った。加えて、JVCなどからの提案によって、JICA環境社会配慮ガイドラインおよびその見直しプロセスについてJICA側からの報告があった。

◎第10回プロサバンナ事業に関するNGO・外務省意見交換会(2月6日)：標記会議に渡辺、高橋が参加。5月以来の開催なので、8月の現地調査に基づいて議論を行った。

◎第20回開発協力適正会議(2月24日)：標記会議に谷山、高橋が参加。

◎産経新聞のコラムに対して要請書を作成(2月25日)：曾野綾子氏の2月11日付コラムがアパルトヘイト政策を推奨していると読めることから、他2団体と共同でその撤回を求める要請書を作成、曾野氏および産経新聞に送付した。(谷山)

南アフリカ

HIV陽性者支援
(リンポポ州)



小5生徒と児童虐待と対策について議論した

2月9～13日、訪問介護ボランティアを対象としたエイズ治療研修を実施。研修を通し、特にエイズ治療薬についての知識がまったくなかったことを実感。薬の名前だけでなく、その副作用などを熱心に学んだ。

3月9～13日には、本事業開始から数回に渡り実施してきたカウンセリング研修、最後の研修を実施した。今までの学びを活かし、実際に子どもケアセンターで起きた事例において、カウンセリングのスキルを活かすことができたかをそれぞれ発表。その上で、良かった点、改善策などをみんなで議論した。また、子どもケアボランティアによる学校での啓発活動を本格的に開始した。

2月前半には、2015年度に向けて年次計画会議を実施。本事業が最終年にあたることもあり、今後の南アフリカでの活動を視野を広げて議論した。(富田)



ラオス

農業・農村開発／土地・森林
保全事業(サワナケート県)

他のNGOや大使館などの
賛同ロゴが入ったカレンダー

乾季の時期は村の農閑期であるが、JVCの活動においては繁忙期となる。土地の権利や自然資源の大切さについて学ぶ意識啓発活動(法律研修や演劇上演)や、村の周辺および村内土地利用区分をGPSで計測して行う参加型土地利用計画活動は、比較的村人に時間の余裕のあるこの時期にしかできないためだ。農業・農村開発活動においても同様に、乾季にしかできない井戸掘削を行い、現在米銀行を建設している村は、雨季には川の水位が上がりアクセスできないために、この乾季に終わらせるべく協議や作業を進めている。

2月の意識啓発活動では、昨年8月頃から他のNGOと共同で制作した法律カレンダー(土地や森林に係る村人の権利や法律をイラストでわかりやすく説明しているもの)を使った法律研修を、ピン郡の10村で行った。その後、ラオス国立大学法学部の学生4名と教員1名を受け入れ、①土地森林の変化による村の生活変化についての簡易調査、②問題分析、③村人への法律研修を5村で行った。

その他、2村で参加型土地利用計画活動に着手し、4村で深井戸の掘削を進めている。来月からラタン植栽活動を新規村で行う予定。(林)

気仙沼

ししおり
鹿折地区での
復興支援



ワカメの刈り取り作業を行うツアー参加者

1月31日から2月1日にかけて、浦島地区の魅力や震災の教訓を伝えるツアー「週末は気仙沼。～海の仕事と人に出遭う旅2015～」を開催した。参加者の16名は、震災時に避難所となった旧浦島小学校の体育館にて当時の生活を体験したほか、牡蠣むきやワカメの刈り取り作業などを行った。

鹿折地区集合型災害公営住宅の入居予定者間の交流を目的とした「あづまっぺ!『趣味のじかん』」を2回開催し、合計55名の参加を得た。5カ所の仮設住宅を対象に、心身の健康維持を目的とした「さわやか健康相談」を開催し、合計21名が参加した。2月18日には、梶ヶ浦地区で「ひな祭り」を開催し、参加した住宅住民9名はちらし寿司作りを楽しんだ。

高知県津野町から講師を招いて廃校施設利用および地域づくりについての講演会を開催し、浦島地区の住民など34名の参加を得た。合わせて、2月27日から住民とともに高知県内を視察し、先行事例を学んだ。3月8日に実施した防災集団移転のアドバイザー派遣事業では、他地区の造成地の見学や団地内の土留め工事についての協議などが行われた。(伊藤)

アフガニスタン

地域保健医療事業／
教育支援
(ジャララバード州)



保健委員会の合同研修

◎地域保健医療事業：診療所では、薬（特に抗生剤）の過剰摂取を防ぐために副作用を説明し、産前・産後検診を推奨するなど、患者／訪問者へ病気予防の意識喚起を進めている。並行して、村の中で病気予防を進めるために、村ごとに設置している既存の保健委員会すべてを対象にした合同研修を実施した。委員会の運営能力向上を目指して、健康教育における委員会と村人との協力方法や病気予防キャンペーン、将来の資金獲得の可能性などについて議論した。女性たちによる「家族健康アクショングループ」は、毎月の保健に関する学び合いとその後の近所への家庭訪問を順調に進めている。

◎教育支援：生徒たちが健康に関する作文を書き、担当教員が編集して校内に掲示する壁新聞の活動は毎月行っており、1月後半には実施校で有志の生徒たち合計167人が保健知識の理解度を計るテストに参加した。また、女子校で教員同士の学び合い「研究授業」の2回目を実施。同校では唯一の女性教師が自ら希望して他の男性教師の前でモデル授業を行い、参加者間で授業の進め方について長所や改善点のアイデアを出し合った。(加藤)

コリア

絵画交流

『南北コリアと日本のともだち展』

◎国内での取り組み：絵の貸出展示を継続している。3月中旬より西宮で開催された世界児童画展（西宮ユネスコ協会主催）に、朝鮮民主主義人民共和国と大韓民国の子どもたちの絵を貸し出した。

なお、長年東京展の開催会場となっていたこどもの城の閉館に伴い、新たな展示会場の選定を行うなど、2015年度の開催に向けて、ともだち展実行委員会で協議を重ねている。

◎ともだち展合宿：小中学生時代に絵を出品するなどして絵画展に関わった経験のある大学生を中心に、合宿を行った。参加者と絵画展の経緯や意義をあらためて共有するとともに、昨夏に平壤を訪問した学生のプレゼンテーションを聞く時間を持った。(寺西)

イラク

国内避難民への緊急支援
(キルクーク県)

2月中旬、キルクーク県内に逃れてきた国内避難民200世帯を対象として食料支援を実施した。昨年6月の「イスラム国」によるモスル制圧以降、同年11月に続いて2回目の緊急支援となる。今回は現地協力団体「インサーン」が1月上旬より調査を行い、障がい者や母子家庭を中心とした最も脆弱な家族を中心に、砂糖、米、白豆、ビスケット、乳製品、ペーストトマトなどの食料を配布した。

キルクークでは夜間時には気温が約マイナス2～9度になり、国内避難民は厳しい環境の中で生活を送っている。昨年8月末から始めた緊急支援の呼びかけによって集まった寄付金のうち、約4万ドルが今回の配布に役立てられた。

(池田)

スーダン

紛争による避難民・難民への
支援(南コルドファン州)

紛争が続く南コルドファン州で、戦闘を逃れて流入した避難民と地元住民に対する支援を実施している。

生計向上のための菜園づくりは、1月に研修を実施したほか、小規模灌漑のために足踏み式ポンプや手押し車を支援した。2月上旬に種まきが行われ、3月には野菜の収穫が始まっている。

井戸運営の支援では、井戸の定期点検や衛生管理の必要性を伝えるために啓発イベントを6地区で実施。その後、各地区の井戸管理委員会が住民から少額の分担金を集めて井戸の点検・補修を進める動きが出ている。

国連難民高等弁務官事務所と協力して建設する避難民再定住用の住居100棟については、4月着工を目指して資材調達に着手した。(今井)

イベントあらかると

1月～3月

いべんと・ピックアップ!

2/28(土) 東京・豊島区

だから僕はとうふバーガーを始めました。
～次世代に残したい食と農～

2014年度 ラオス事業インターン 金田 奈生子

「とうふバーガー」をキッチンカーで販売する笠井亮吾さんとタイの農村に滞在経験のあるJVCタイ事業担当の下田寛典との対談イベントを、2月末に東京の巣鴨で開催しました。とうふバーガーを切り口にして、スピーカー自身の経験や食生活に関する考え方から国内外の食糧問題や国際協力に話題を広げていく中で、参加者の皆さんに世界全体という枠組みの中で日本人の食生活の裏側にある様々な問題を認識し、国際協力分野での取り組みや身近な人びとの実践を知ってもらうことを目指したものです。

このイベントは、同年度アフリカ事業インターンの稲垣美帆と私とで共同企画・運営したものです。JVCのインターンとしての活動に携わるなかで、私たちは日常生活において

同世代の若い人々の世界の食糧問題や国際協力に対する関心の低さを感じるようになりました。そこで、普段国際協力に無縁の人々でも興味を持てるテーマでイベントを開催することで、身近な生活と世界とのつながりを見出してもらえるのではないかと考えた次第です。企画当初から、スピーカー選び、イベントの形式、会場の下見、広報活動などを稲垣とすすめていきました。

イベント当日、開場すると参加者の皆さんが続々と集まってくださり、客席はほぼ満席となりました。こちらで用意した黒豆茶を口にしつつ、笠井さんと下田の対談に熱心に聴き入る参加者の皆さんの姿から、今まで国際協力に興味のなかった方やその逆で国際協力にのみ興味のあった方に、今まで知らなかった分



自身の体験をもとに食や農に対する考え方をエピソード満載で話す笠井さん(写真中央)とJVC下田(同右)。左は筆者

野や生き方を知ってもらえたかと思っています。

終了後、「お二人とも個性的で楽しかった」「とうふバーガーのお話が聞けてよかった」「下田さんの『有機というのは人と自然のつながりだから、有機であることにこだわりすぎて、人との有機的なつながりを蔑ろにしまっては意味がないのではないか』という話がよかった」という肯定的なご意見をいただいた一方で、「(登壇者の)声が聞こえなかった」「進行がもっとスムーズだとよかった」「座席が狭かった」などのご指摘もいただきました。これらは反省点として、次につなげていきたいと思っています。準備の段階からサポートしてくださった皆様、本当にありがとうございました。

その他の主なイベント

1/8(木) 東京・新宿区

パレスチナ・ガザ現地状況と
緊急支援活動報告会

1/11(日) 東京・JICA地球ひろば

サッカー・アジア杯・対戦国を知ろう

1月開催のサッカー大会で日本代表の対戦国が中東諸国であることをきっかけに他団体と共催。大会の見どころやサッカーチームの紹介とともに各国の社会状況を伝えました。

1/20(火) 東京・千代田区

NAFTAの国メキシコにTPPを探る

1/31(土) 東京・JICA東京国際センター

地域からの学びを活かす50の方法
～海外と日本の地域づくりをつなぐ～

海外で課題解決に取り組むNGOとして、日本の地域づくりに関わる方々とながらる場に参加しました。

1/31(土)～2/1(日)、3/28(土)～29(日)

週末は気仙沼。

東日本大震災で津波の被害を受けた気仙沼市を訪れ、現地の人との出会いを通して復興への取り組みを実感する一泊二日のツアーを2度開催しました。

2/7(土)～2/8(日) 大阪・大阪市

ワン・ワールド・フェスティバル

2/20(金) 東京・JVC東京事務所

対話BAR「人質事件と
“イスラム国”を考え合う夜」

過激派組織「イスラム国」に人質として拘束され殺害された2名の日本人。この事件や「イスラム国」について意見を共有し考える場をBAR形式で設けました。

2/28(土) 東京・北区

集团的自衛権を問う

3/4(水) 東京・港区

国際家族農業年、
日本の農業、私たちの食

国際家族農業年である2014年、家族農業の可能性をさぐる他団体との共催セミナーの4回目。生産者と消費者をつなぐ取り組みと日本の家族農業の課題について考えました。

3/13(金) 東京・JVC東京事務所

長引く紛争と被災民への支援

スーダン現地代表の今井が一時帰国し、現地の様子をお伝えしました。

3/14(土) 東京・台東区

スーダンを満喫

～作って、食べて、お話を聞こう～

在日スーダン人女性を招いて、スーダン料理を作って食べながら、スーダンでの暮らしのお話を聞きました。

3/14(土) 東京・新宿区

どうする!? タイ・バングラデシュの原発
～福島でみんなで考えた～

国連防災世界会議に合わせてタイとバングラデシュから市民活動家をお招きし、両国の原発推進の状況をお聞きました。

3/15(日) 神奈川・横浜市

彼らの選択 私たちの選択

～ラオス・フィリピン・祝島～

3/19(木) 東京・JVC東京事務所

アラビア語で名前を書いてみよう!

～中東に触れる連続文化講座 vol.1～

中東を身近に感じてもらうための企画として、アラビア語講座を開催しました。

3/27(金) 東京・JVC東京事務所

春らんまん

～食べて、読んで、感じるアフガン～

アフガニスタンの絵本や食事を紹介することで、ニュースでは触れられない同国の文化を紹介しました。



JVCなひと

裏方から

「歌声ボランティア」へ

挑戦

JVC会員／ボランティア

藤井 猛史

JVC会員になって8年半になります。会員になってすぐの12月に、国際協力コンサートがありました。ボランティアとしての初参加は、朝一番のステージのひな壇の設営作業でした。そのとき漠然とですが、「いつか合唱団としてステージに上がってみたい」と思ったことを覚えています。

その後、私はJVCの多くのボランティアチームに参加し、いろいろな出会いがありました。いつの間にか入会から7年が経過し、いつ合唱に参加するのだろうか...と思っていた頃、ようやく転機が訪れました。

一昨年12月に、ボランティアとしてではなく、初めてチケットを買ってこのコンサートを観きました。前の方の席だったので、合唱団の皆さんが熱唱する表情がよく見えました。指揮者は青木洋也さん、そしてアイネス・バスビルさんがコンサート実行委員長を務める最後の特別な「メサイア」でした。演奏が終わった瞬間、感動のあまり涙が出たのを覚えています。自分も歌いたい、本格的に気持ちが盛り上がりました。

そして合唱団に入団、

昨年4月から



毎週水曜日の合唱練習に参加し始めました。定時後に勤務先から駆けつけるので18時30分の練習開始に遅れることも多く、十分な練習はできませんでしたが、それでも、周りの経験ある団員の皆さんに助けられながら、また夏合宿を経て段々と楽しく歌えるようになりました。最後の10日間、指揮者マノイ・カンブスさんとの顔合わせ、オーケストラと音合わせなど印象に残る練習がありました。

ついに12月、本当に舞台に立ちました。当日会場入りしたとき、スタッフやボランティアさんに「よろしくお願いします」と声をかけました。「オールJVC」でつくるコンサート、そんな強い思いがありました。約3時間のステージはあつという間で、最後のアーメンコーラスでは、終わりを迎える寂しさと同時に、無事に終わったうれしさが。

さて、今年は新たな曲でまた4月から参加できればと思います。

おすすめ本

『ガルトウング平和学入門』

ヨハン・ガルトウング＋藤田明史編著（法律文化社）
2003年 25000円（税別）

バレスチナ事業担当 並木 麻衣



「平和は歌って願うものでも、ハトや虹でもない」——そうスピーチしたのは、「地雷禁止国際キャンペーン」と共にノーベル平和賞を受賞したジョディ・ウィリアムズだった。では一体、平和とは何なのだろう？ 誰がどうやって実現するものなのだろう？ 思索を深めたい人に本書をお勧めしたい（実は筆者も会員の方からの勧めで読んだ次第である...）。

ためには暴力を扱う能力をもたなければならぬ、とガルトウングは説く。肉体・精神的に、そして社会として、暴力への抵抗力をもつということだ。

本書ではガルトウングが生涯をかけて打ち立ててきた平和学が、改めて展開されている。発行から十余年経つが、それでもこの本は輝きを放ち続けているように思う。それは、本書が「平和」を遥か遠くの国際政治上に任せるのではなく、私たち一般人の手に取り戻してくれるからである。

暴力に抵抗するには、どうしたらよいのだろうか。それは共感・創造性・非暴力によって対処することだ、と本書は説く。相手に対する深い理解をもって他者の犠牲を避け、共通目標を創り出す力によって目標の衝突を乗り越える——それも非暴力によって、である。この取り組みがミクロでもマクロでも必要とされるのが平和構築であるとなれば、私たち市民一人ひとりが平和ワーカーになれるのではあるまいか。

本書の中で著者は「平和と健康は似ている」という。それは双方が人間の「能力」であるためだ。心身ともに健康であるために、人は病気を扱う能力、つまり肉体・精神的な抵抗力と社会的取り組みを必要とする。同様に、人が平和を手に入れる

興味深いのは、これらを考察する平和学自体が今も生成の途にある点だ。私たちの試行錯誤も平和学の一端を担えるかもしれない——そう思いながら日々歩みを進めたい。

お知らせ

第16回 JVC 会員総会のご案内

年に1回、多くの会員の方々と一同に集える場である会員総会を今年も開催いたします。

JVCの活動を通して世界各国の課題を共に考える場でもあります。議案書は、別途6月初旬にお送りいたします。

日時 2015年6月13日(土) 10:00~13:00(予定)

会場 渋谷区 東京ウィメンズプラザ 視聴覚室

議案 [1] 2014年度活動報告および決算報告
[2] 2015年度活動計画および予算案

例年と同様、総会終了後の午後に、「会員のつどい」を企画しておりますので、こちらもご参加ください。参加される場合には昼食をご持参ください。

「冬の募金」報告

2014年「冬の募金」へご協力いただき、ありがとうございました！

11月~2月末集計

1,116件 10,462,491円

指定寄付／無指定寄付すべてを含みます。

募金集計

募金にご協力ありがとうございます

JVCの活動は、皆さまの募金によって支えられています。
JVCへの募金は、税制優遇措置を受けることができます。

指定先	期間(1~2月)
無指定	5,499,177
タイ	16,000
カンボジア	99,299
ラオス	837,844
南アフリカ	44,500
アフガニスタン	173,647
イラク	98,170
スーダン	39,000
パレスチナ	1,206,952
南タイ	1,034,781
コリア	28,400
東日本大震災	1,103,264
みどり一本	112,446
東京管理	13,040
合計	10,306,520

上表に「夏／冬の募金」も含みます。

人事

入職

渡久山 舞 ラオス事務所現地調整員(2月10日付)



大学でアフリカの貧困構造を分析、「農が生きる基本」と思い立ち長野県小谷村で農業に従事後、ケニアで農業指導をして今に至る。手作り生活と伝統文化に興味があるのでラオスでどんな農村生活の知恵が見られるか楽しみ！

河村 由美子 ファンドレイジング担当(3月16日付)



大学院卒業後、国内外の民間企業を経て環境保護団体に資金調達に奔走。自然破壊の元凶を追求する中で人道問題に興味を持ち、JVCに流れ着く。「死ぬまで成長」をモットーに(いい年して)博士後期課程の現役学生です。

橋本 貴彦 カレンダー事務局(4月1日付)



10代サッカー→20代海外→30代保育士という人生を送ってきた42歳は、JVCのパレスチナインターンを経て、念願の国際協力の場に身を置く事になりました。カレンダーの魅力をより多くの方々に広げたいです！

皆嶋 円 カンボジア事務所現地調整員(4月1日付:現地採用より)



大学卒業後、英国の大学院で歴史研究に従事。「足りないものを差し出すのではなく作る方法を一緒に考える」活動理念に魅かれJVCへ。研究を通して得た知識を開発現場に生かして、プロの支援屋になります！

異動・復職

大村 真理子 広報担当(3月1日付:カレンダー事務局より)

石川 朋子 コンサート事務局(4月1日付)

退職

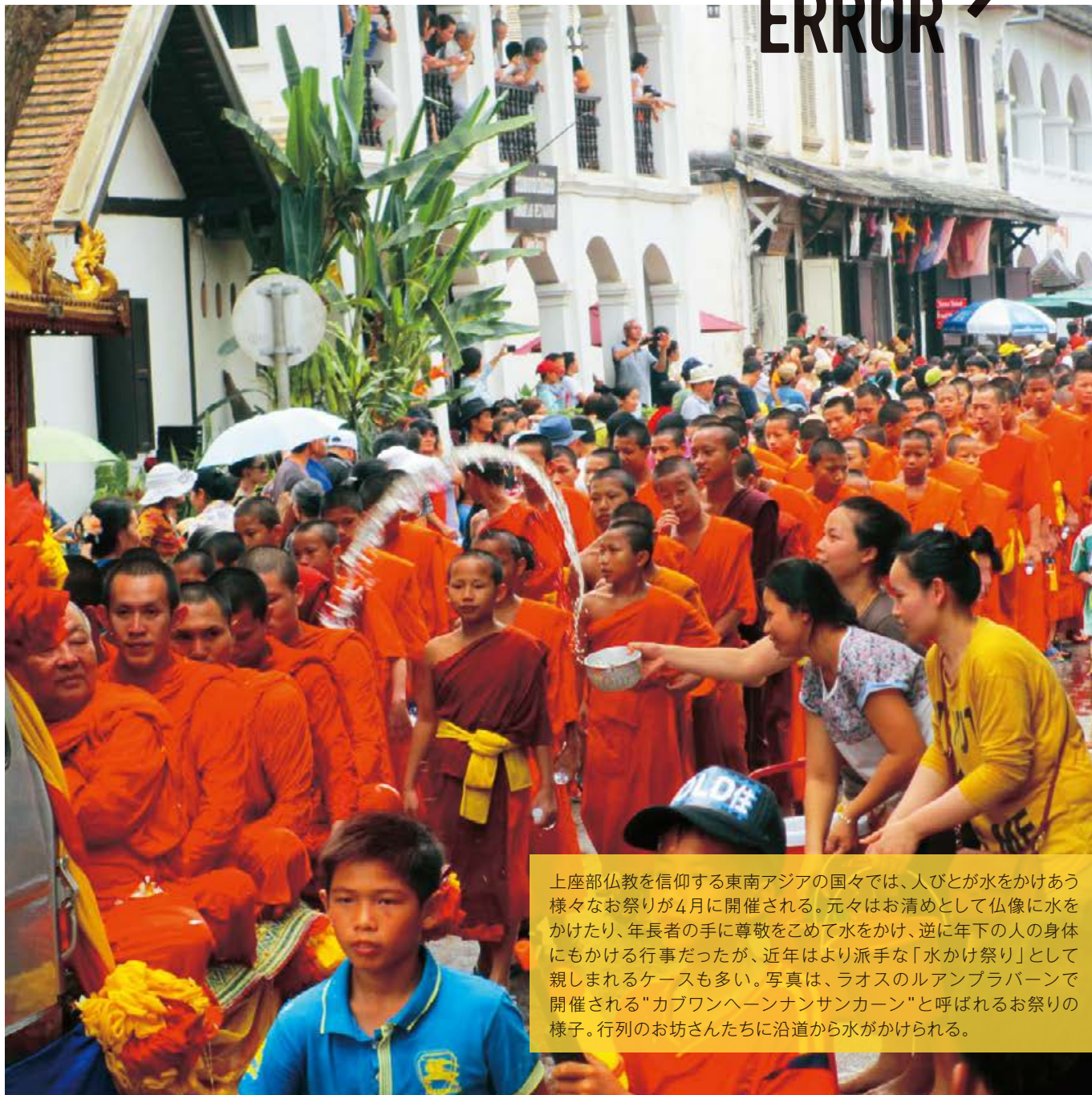
広瀬 哲子 広報担当(2月28日付)

佐伯 美苗 スーダン事業担当(3月31日付)

太田 華江 カンボジア事務所現地調整員(3月31日付)

編集後記

前月号から本誌編集を一部担当することになりました樫田秀樹です。私がボランティアとしてJVCを初訪問したのは1984年。真っ先に知り合った一人が当時編集長の下園さんでした。エアコンも扇風機もワープロもない(!)小さな事務所の小さな机からの毎月発行(当時)は今思えば神業です。私は85年から2年間、JVCのコーディネーターとしてソマリアの難民キャンプで活動し、その後フリージャーナリストとなりますが、2002年初頭に空爆直後のアフガニスタンを取材したとき、JVCも予備調査をしていたことが縁で、現地臨時コーディネーターを務めました。以後、たびたび事務所に取材や冷やかして顔を出していますが、まさか30年も経ってから会報誌編集という責任ある職務を依頼されるとは世の中わかりません。ソマリア着任当初の「本当にオレでいいのか」といった不安がフラッシュバックしそうです。皆さま、どうぞよろしく願いいたします。(樫)



上座部仏教を信仰する東南アジアの国々では、人びとが水をかけあう様々なお祭りが4月に開催される。元々はお清めとして仏像に水をかけたり、年長者の手に尊敬をこめて水をかけ、逆に年下の人の身体にもかける行事だったが、近年はより派手な「水かけ祭り」として親しまれるケースも多い。写真は、ラオスのルアンパバーンで開催される「カブワンヘンナンサンカーン」と呼ばれるお祭りの様子。行列のお坊さんたちに沿道から水がかけられる。



特定非営利活動法人

日本国際ボランティアセンター

日本国際ボランティアセンター(Japan International Volunteer Center)は、1980年2月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVCの活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられるアジアやアフリカ・中東の人びとに協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志でJVCに参加し、活動を継続してきました。JVCはボランティアという言葉を、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

JVCでは会員を募集しています

会員数(4月1日現在) 合計1,036名(正会員526名 賛助会員510名)

会員は総会に出席し、JVCの方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年4回の会報誌と年次報告書をお届けします。入会のお申し込みや、会員の方の住所変更などは会員担当の宮西まで。

メールアドレス miyanishi@ngo-jvc.net

- 一般会員 10,000円
- 学生会員 5,000円
- 団体会員 30,000円

それぞれに
正会員と賛助会員があります

JVCのオリエンテーション(説明会)にお越しください

JVCの活動内容をご紹介します。
お気軽にご参加ください。

会場 JVC東京事務所 参加費 無料 予約 不要

第1月曜日 午後7:00~8:30
第2・第4土曜日 午後2:00~3:30

ウェブサイト <http://www.ngo-jvc.net/>

メールアドレス info@ngo-jvc.net

Facebook NGOJVC

twitter @ngo_jvc

◎発行 = 日本国際ボランティアセンター(JVC) 〒110-8605 東京都台東区上野5-3-4 クリエイトPone秋葉原ビル6F TEL 03-3834-2388 FAX 03-3835-0519

◎発行人 = 谷山博史 ◎編集人 = 大野和興・長谷部貴俊 ◎編集スタッフ = 榎田秀樹・細野純也 ◎印刷 = 株式会社ベスト・プリンティング

本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。本誌は、日本の森の間伐材を有効利用して作られた用紙「間伐材印刷用紙」(古紙90%・間伐材パルプ10%)で作成しました。

